ヤマトの西と東と－古道にみる二上山地域－

渡　部　　修

1．古代文献にみるヤマトの東西観

周知の通り、記紀万葉に見える最も著名な葛城二上山の記事は、大津皇子の移葬に際して大伯皇女が歌った歌である（『万葉集』巻２、１６５・１６６）。そこでは、題詞にも歌詞にも「二上山」の文字が見えている。しかし、この地域の呼称としてはもう一つ「大坂」があった。その初出は崇神紀９年２・３月条で、天皇の夢に「墨坂神」と「大坂神」を祀るよう託宣が降り、これを祀ったとある。「墨坂神」は宇陀市（旧榛原町）鎮座の墨坂神社、「大坂神」は香芝市逢坂・同穴虫鎮座の大坂山口神社のいずれかであろうと考えられる。また、反乱・平定の伝承中にも「大坂」は現れ（崇神天皇１０年９月条、履中天皇即位前紀、天武天皇元（６７２）年７月条など）、難波・河内方面からヤマト入りする際の要衝としての側面を見せている。更に、天武天皇８（６７９）年１１月条には、龍田と共に「大坂」に初めて関を置いたことも見える。今日では、大伯皇女の歌により「二上山」の名が著名だが、古代にあってはこの地域は「大坂」と称される方が一般であったのである。言うまでもなく「大坂」の「坂」はサカイ（境）のサカであり、それだけに、「大坂」の呼称が一般であったことは、古代にあってこの地がヤマトの西の境をなす要地として強く意識されていたとことを示している。

当然のことながら、こうした「大坂」の伝承記事には、そこを通る道の名も付随して現れる。履中天皇即位前紀では「当摩径（たぎまじ）」（記では「当岐麻道」）、天武天皇元年７月条には「石手道（いわてのみち）」「大坂道」が見える。これらが難波方面から二上山地域を通ってヤマト入りする道筋であったことは疑いない。そしてそれが、最終的には横大路を通って東の境たる墨坂まで通じていたであろうこともまた疑いない。地理上の観点から見れば、ヤマトにおいては西の「大坂」東の「墨坂」という東西軸が確かに存在したのである。

さて、崇神天皇１０年９月条には、倭迹迹日百襲姫薨去に伴う箸墓造営に関して「大坂山の石を運びて作る」と見え、その時の時人の歌として「大坂に　継ぎ登れる　石群を　手遞伝に越さば　越しかてむかも」の歌が伝わる。箸墓には柏原市芝山の玄武岩が運ばれていることから、「大坂山」とは二上山北部、河内側をも含めた相当広範囲にわたる呼称であったと思われる[1]。二上山南部の河内側、太子町山田にも古代の石材切り出し場の遺跡が残り、その石材は高松塚古墳にも用いられている。崇神紀の記事、特に時人の歌は、二上山を中核とする「大坂」の地が古くから石材の切り出し場として認識されていたことを反映するものとみてよいであろう。天武紀に見える「石手道」の呼称なども、石材を切り出し手遞伝で運ぶ様との関連を想像させるところである。

二上山の河内側、太子町にはまた、６世紀末から７世紀中葉までの終末期古墳が集中して存在している。これらは、この地の名を取って磯長谷古墳群と呼ばれているが、特に敏達・用明・推古・孝徳天皇陵と聖徳太子廟は「梅鉢御陵」と称されて有名である。このうち、孝徳天皇陵に関しては、『日本書紀』に「大坂磯長稜」とみえ、この地もまた「大坂」の一部であったことが明らかである。

そもそも、履中天皇記の墨江中王の反乱伝承では、履中天皇が難波からヤマト入りする際、「大坂の山口」で出会った少女に、武器を持った兵が多くいるから「当岐麻道」を迂回して山を越えるよう

にと教えられている。「当岐麻道」は現在の竹之内街道、或いはそこから分岐して岩屋峠を越えて当麻へ抜ける岩屋越えの道に相当するかと思われるが、いずれであっても、河内からヤマト方面へ二上山を越す道であることは間違いない。「大坂の山口」からその「当岐麻道」を通ってヤマト入りせよというのだから、この「大坂の山口」が河内側にあることは明らかである[2)]。

このように「大坂」とは、二上山を中核としてその河内側を含めたかなり広い地域の呼称だったのであり、それは単にヤマトの西の果てというわけではない。その背後にヤマトとは別の世界を持ち合わせた地として意識されていたのだと考えるべきであろう。だとすると、その地を通る古道とはヤマトと別の世界とを繋ぐ回路ということになる。「大坂」とはそうした回路を持った別世界への入り口としての性格も合わせ持っていたことを忘れてはなるまい。

東西を基軸としたヤマトの信仰的世界観という点からいえば、西の「大坂」の向こうにある世界とは出雲なのであろう。それは東の「墨坂」の彼方に伊勢が控えていることと対応している。しかし、古道を視点としてみた場合、「大坂」の背後に控えた世界は些か様相を異にする。「大坂」の背後は河内であり、それは難波へと続いている。そしてその先には西国を経て朝鮮半島が、更には当時の最先進地域たる大陸が控えているのである。

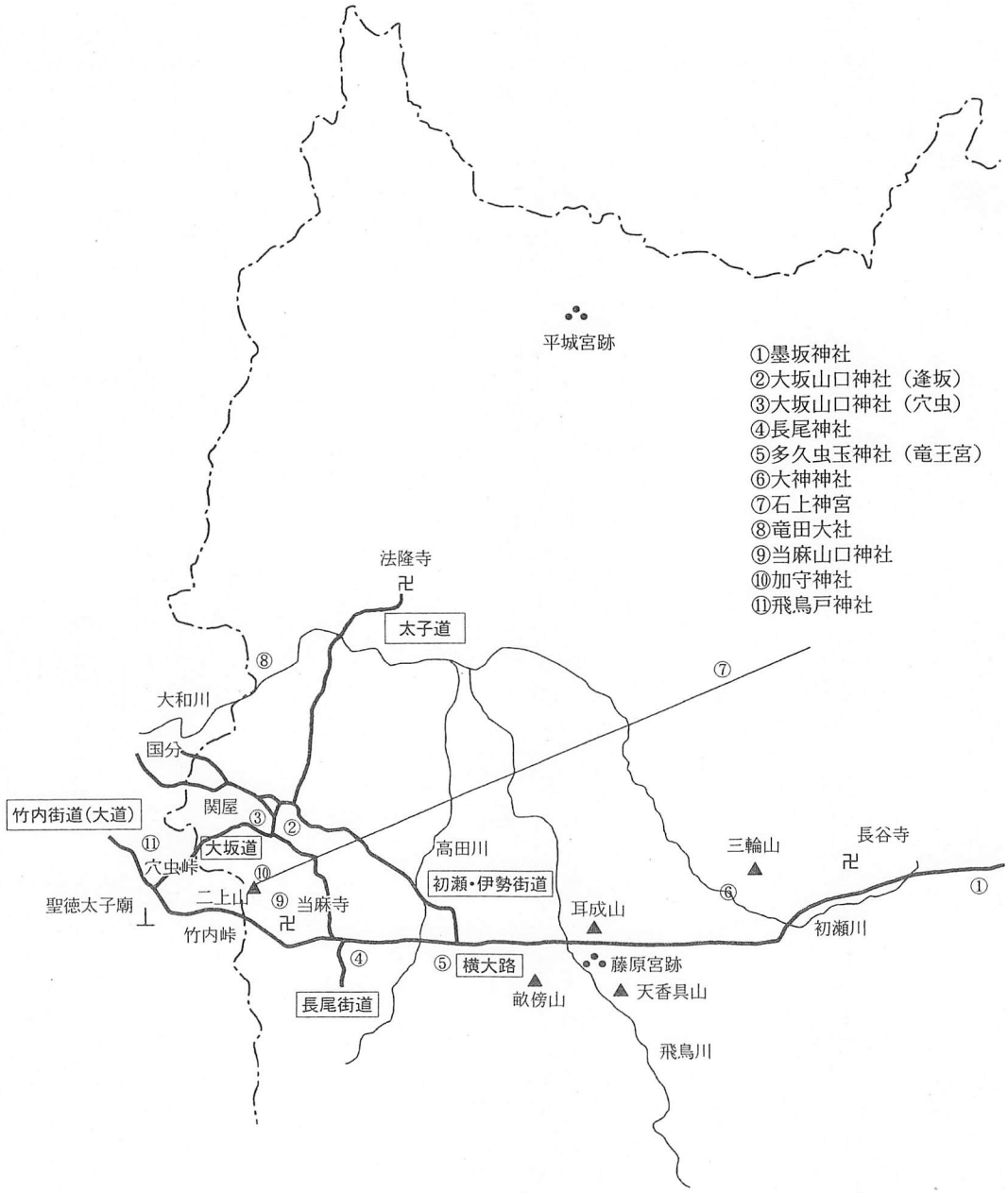
難波は、神武東征伝承においてヤマト入りしようとした神武がその足掛かりとした場である。神武はそこで長脛彦の抵抗に遭いやむなく迂回することにはなるのだけれども、これに象徴されるように、難波とは西から新たなものがヤマトへ流入する際の拠点として意識されていた。幾度か難波に都が置かれるのも、西との接点を求めてのことであろうし、朝鮮半島や大陸からの外交使節もまた、まずは「難波館（なにわのむろつみ）」で饗応を受けた後、ヤマト入りするのが慣例であった。

ヤマト入りには、大和川を船で遡って海柘榴市(つばいち)に上陸するか、文献中に見える「大坂道」や「石手道」、「当摩径（当岐麻道）」などを通ったものであろう。陸路は、二上山北麓乃至は南麓の峠越えであろうし、大和川を遡る水路もまた、些か北には外れるが、「大坂」の地域を広く見た場合、その北方を大回りする経路とみることができる。ヤマトにとって「大坂」とは、西国はもとよりその先の外国文化までもが具体的な人や物の形をとって、そこを越えてやってくる場に他ならなかったのである。

推古天皇２１（６１３）年、難波から京に到るまで「大道」が置かれた。「大道」は難波から南進し、河内丹比で東に転じて古市に到り、竹之内峠を経てヤマトへと入る道と考えられている。二上山の南端を越える道である。こうした道が整備されるのも、ヤマトにとって「大坂」が外国文化流入の地として重視されていた現れと捉えられよう。「大坂」は単にヤマトの西を区切る地ではない。そこを通じて外国にまでヤマトを開く地域だったのである。

２．古道の道筋と二上山地域

地図Ｉに示した丸囲み数字は神社の所在地である。「大坂」を通る古道を考える際にまず、重要になるのは、②③の大坂山口神社であろう。②が香芝市逢坂の大坂山口神社、③が香芝市穴虫の大坂山口神社である。何れを式内の大坂山口神社に比定すべきなのか未だ結論を得ていないが、注目すべきは、何れもが二上山をフタカミとして望めない地に鎮座していることである。二上山をフタカミとして望めるのは、地図上に二上山頂を基点として引いた直線、神社番号で言えば、⑩の加守神社と⑦の石上神宮を結ぶ線以南に限られる。実地の踏査に拠れば、⑩の加守神社はもとより、⑦の石上神宮でも二上山をフタカミとして望むことは不可能である。当然のことながら、それより遙か北にある平城

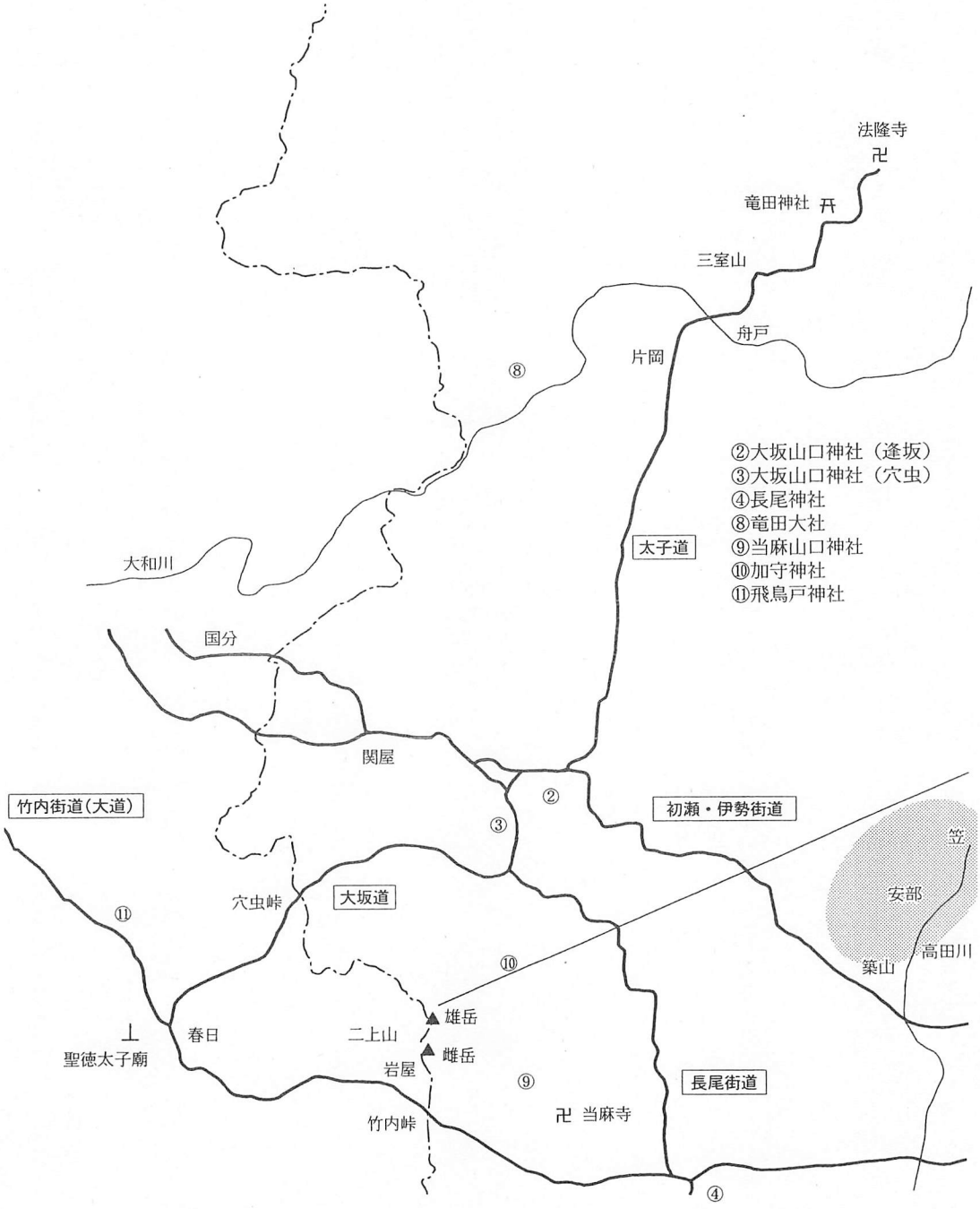


図Ⅰ　二上山地域関係古道図

京からは二上山はフタカミとしては望むべくもない。

二上山をフタカミとして望み得ない地に「大坂」の象徴たる大坂山口神社が鎮座しているということは、「大坂」の呼称が二上山のフタカミの山容に由来するものでないことを如実に示している。古代の「大坂」は、二上山のフタカミの山容ではなく、その地の機能に基づく地名であったと考えなければなるまい。そうである以上、「大坂」の機能とは大坂山口神社が鎮座する二上山北麓の古道の道筋に求められるべきであり、また現在２社が伝えられる式内大坂山口神社の比定もそれに基づいて行われるべきものと思われる。

二上山北麓において古代文献中に見える「大坂道」として比定されているのは穴虫峠越えの道である。ヤマト側からの道筋で言えば、明日香・藤原から横大路を東進し、長尾神社（④）付近で北転、二上山東麓をそのまま北進して穴虫峠を越えて、太子町春日付近で竹之内街道と合流する道である[3)]。しかし二上山北麓には、この穴虫峠越えの道の他に、関屋・国分を越えて難波方面へ通ずる道もある。即ち、香芝市穴虫付近で穴虫峠越えの道から分かれて北進、関屋・国分へと向かう道と、もう一つは横大路から大和高田市の多久虫玉神社（⑤）の付近で北に別れ、そこから国道１６５号線に重なるように西北に進んで香芝市逢坂を経て、関屋・国分へと向かう道である。香芝市での呼称を用いれば、



図Ⅱ　二上山地域関係古道図

前者が長尾街道、後者が初瀬・伊勢街道に相当する。この両道は関屋・国分を超えた後、天武紀に現れる「大津道」(元〔６７２〕年７月条）に合流し難波へと通じていたものと考えられる。「大坂」には、難波・河内方面とヤマトを結ぶ道として、穴虫峠越えの他に二つ、関屋・国分を超える道があったのである。更に、関屋・国分越えの道の近傍には外交使節入京の経路として用いられた大和川も存在している。穴虫・関屋・国分のある地は、まさに河内難波方面とヤマトを結ぶ要衝であった。それこそが、この地を「大坂」と呼ぶ由縁となっているのであろう。

さて、この「大坂」には、法隆寺を基点として、初瀬・伊勢街道、長尾街道を北東方向から横切り、穴虫峠を越えて竹之内街道に合流する道もある。竹之内街道との合流点付近には、伝聖徳太子廟（叡福寺）が存在している。言わば、法隆寺から叡福寺を結ぶ道で、現今この道は「太子道（聖徳太子葬送の道)」と呼ばれている。５０年に一度、法隆寺から叡福寺まで、この道を通って聖徳太子葬送の様が再現されるのだという[4]。

道筋は、法隆寺から、その西方藤ノ木古墳を経て龍田神社に到り、そこから南進、三室山東麓を抜けて舟戸に到り、そこで大和川を渡って現在の国道１６８号線に合流し、ほぼその道沿いに南進して香芝市北今市付近から穴虫峠へと向かうものである。北から、二上山雄岳を目標に河内方面へと抜ける道といって良い。１６８号線との合流点付近には片岡山があり、片岡神社が鎮座すると共に聖徳太子の行路死人歌伝承を伝える達磨寺も現存している。

この道筋を拡大して示したのが、地図Ⅱである。香芝市北今市から穴虫峠付近については開発が進み、道筋の想定は困難なのが残念だが、恐らくは長尾街道と一部重なるようにして穴虫峠へと向かったのではなかろうかと思われる。地図に明らかなように、「大坂」の神として比定される二つの大坂山口神社は、この太子道と初瀬・伊勢街道（逢坂)、長尾街道（穴虫）との交点付近にそれぞれ存在している。

古代史研究では「大坂」を穴虫峠とし、「大坂道」を穴虫峠越えとするのが一般である。しかし、既に述べたとおり、広く見れば関屋・国分越えも「大坂」と見ることは可能なのである。太子道は、北東方向からまさに古代史研究の想定する狭義の「大坂」を越える道であり、また関屋・国分を越える初瀬・伊勢街道、長尾街道はまた広義の「大坂」を越える道ということになる。その交点付近に、二つの大坂山口神社が鎮座しているということは、両社が、穴虫越えの道を意識しつつ、関屋・国分を越える初瀬・伊勢街道、長尾街道のそれぞれの道筋に応じて祀られていることを意味しているのではないのだろうか。即ち、逢坂の大坂山口神社は、穴虫越えと初瀬・伊勢街道に対応し、同じく穴虫の大坂山口神社は穴虫越えと長尾街道に対応するということである。

先にも述べた通り、両大坂山口神社のどちらを式内大坂山口神社に比定するかは、未だ結論が出ていない。本論でもその結論を出すだけの材料は持ち合わせていない。が、南東方向から「大坂」を越える二筋の道と、北東方向から「大坂」を越える道の交点付近に両大坂山口神社が鎮座する意味は小さくはあるまい。要は、二上山がフタカミとして望めない地、二上山雄岳北麓こそが「大坂」の真の中核であったことをこの事実は物語っている。そして、その北方には水路として機能した大和川が廻っている。「大坂」とは、要は、大和盆地南北から、二上山雄岳北麓を通って河内・難波方面へ通じる交通の要衝を意識した呼称であったのである。

そして、この「大坂」を通る三本の道は、いずれもが墨坂から横大路、竹之内街道を経て河内丹比道へと通じる推古紀の「大道」に比定される道に連接している。大和川を遡る水路も、最終的には海柘榴市に上陸し、この道に接続する。「大道」が二上山南麓を通る主要街道であったことは疑いないから、二上山北麓の「大坂」を通る道が全てそこに連接しているという事実は、「大坂」が二上山南

麓をも含み持ち、場合によっては二上山そのものに対しても用いられた呼称であったことを窺わせる。

「大道」と長尾街道が連接する當麻町長尾付近には、式内長尾神社が鎮座する。ここには、三輪の大神神社（⑥）、或いは高田の竜王社（多久虫玉神社）が竜の頭で長尾神社がその尾に当たり、それ故に大神神社や竜王社が西向きなのに対して長尾神社は東向きなのだという伝承が伝わる[5]。高田の竜王社の鎮座地は、横大路と初瀬・伊勢街道が連接する地点である。この伝承は、長尾神社を基点として、横大路とそこに連接する道に基づいたヤマトの東西観を示す伝承とみて良いであろう。

また、広陵町三吉の大垣内の地蔵堂には、享保年中本尊の地蔵尊が行方不明となったが、ある時姉妹の尼僧に「河内の国春日の里に持ち去られた、早く大垣内に帰りたい」との夢告があり、それから暫くして春日の人が地蔵尊を背負ってやってきたとの伝承が伝わる[6]。河内の国春日は現太子町春日で、そこで「大坂道」が「大道」に連接する。ここからなら穴虫越え、竹之内越えいずれの道を通っても二上山東麓へと出ることができる。この伝承は、二上山の東麓と西麓が、その北麓と南麓を通る道によって一つの交通圏となっていたことを物語っていよう。

更に、この太子町春日から「大道」を西に暫く進んだ羽曳野市飛鳥には飛鳥戸神社（⑪）が存在している。河内側からしても、太子道と「大道」との連接点が東の区切りという意識があったものかと思われる。この地に梅鉢御陵を始めとする古墳群が存在し、また、當麻寺の前身たる万法蔵院があった太子町山田がこの近傍であることも興味深い。山田はまた、三十年ほど前までは４月２３日のダケノボリや５月１４日の当麻レンゾを、当麻を始めとする二上山東麓の地域と同様に行っていた。これは太子町でもここだけに伝わる慣習であったという[7]。

現今確認できる古道の道筋とそれに纏わる伝承とを勘案する限り、「大坂」とは、その中核を二上山北麓とするものの、その南麓を通る道をも含んで捉えるのが適当である。そのように考えたとき、「大坂」の象徴となるのは二上山そのものであろう。飛鳥・藤原から望めば二上山はそのフタカミの山容と共に、フタカミの山容を望めない法隆寺や平城からはその雄岳の姿が、ヤマトの西を区切ると同時にそこを越えれば河内や難波、更には大陸まで繋がる地として意識されていた。それが「大坂」と呼ばれる地であったに違いない。

３．二上山地域の東西観

さて、この地域では、大晦日、正月の準備が済むと友達同士誘い合わせて二上山へ上ったという。頂上からは高田方面にキツネノヒが行列を作って行く様や、大きな火の玉がポカンと現れるとたちまち四方に散る様が見られ、そのキツネノヒの多い少ないで、その年の作柄を占ったりしたともいう。キツネノヒは初詣に向かう人々の提灯の行列、火の玉は大神神社の繞道祭の火だろうとされ、キツネノヒはまた、高田の築山の辺りに見下ろされたのだという伝承もある[8]。

ここに見える「二上山頂－大神神社」「二上山頂－高田築山」という対応関係は、先に紹介した長尾神社と大神神社・竜王社に関する伝承に現れた「長尾－三輪」「長尾－竜王」の対応関係と同類である。これは、この地域に、広くヤマト全体に関わる東西観とこの二上山地域に限った東西観という、いわば二重の東西観が存在していたことを物語る。

こうした東西観の存在は、この地域の伝承や行事のあり方からも伺い知ることが出来る。

例えば、香芝市田尻には、関屋から北に入った大峠の日切地蔵の伝説が伝わる。初瀬の人から貰ってきて祀った地蔵尊を金に困って大阪の人に売ってしまったが、その後、地蔵尊を提供した初瀬の人が饅頭を供えに来て、地蔵尊がないのを見て立腹して帰った。そこで村人が地蔵尊を買い戻したのだ

という。またこれとは別に、大峠には初瀬の人が大阪で石地蔵を買ってきたが余りに重いので置いていった地蔵尊もあるという[9]。

大峠は関屋から柏原市国分へと抜ける峠である。伝承からは、この地に初瀬と大阪を繋ぐ街道が通っていたこと、そしてこの地がその街道中の境として機能していたことが読み取られる。注目されるのは、ここに初瀬が登場することであろう。或いはこれは、初瀬詣での流行に伴って取り込まれたものなのかも知れないが、それでもここに「大坂－初瀬」というヤマト全域に関わる東西観が反映されていることは確かである。

また、この地域から伊勢参りをする場合、必ず初瀬を通ることになる。それは街道筋から当然のことではあるのだが、當麻町勝根や染野では、伊勢参りの人を初瀬まで送って行くことが習いになっていたという。勝根では、初瀬まで送って行った者のうち気のあったものどうしが、他の皆が食事をしている間に抜け出して伊勢に参ることを「抜け参り」と称してもいる[10]。伊勢参りに行く人々を送って行くときの東の果てが初瀬だったのである。

そして、伊勢に参った者達は、京大阪を回って西から帰って来るのだが、その時、親族が迎えに出向くのは旧３月２３日のダケマイリの日で、迎えに出向く場は、勝根では河内まで、加守では関西線の柏原駅まで、染野では岩屋までと伝え、それをゲコムカエ、サカムカエなどと称していた[11]。確認できる伝承上での迎えの場が全て、二上山を含めた「大坂」の河内側であることが注目される。こうした伝上にも「大坂」が河内側を含めた地域であったことが現れているし、その「大坂」と「初瀬」を対応させる東西観がこの地域に存在していたことも明らかに読み取ることができる。

この他、旧１２月９日は初瀬寺にハダカマイリをした[12]とか、「東お初瀬まで西や当麻まで、音に聞こえたおまき女郎」といった子守歌[13]、「當麻寺から野よ初瀬寺　通ふかごや、なおしゅしょな」といった籾すり唄[14]がこの地には伝えられる。いずれもこの地「大坂」と「初瀬」が対応させられていることが知られるであろう。

そもそも、最も著名なこの地の伝説の主人公中将姫もまた、長谷観音に願を掛けて生まれた申し子なのであった。

ヤマトの東に位置する三輪・初瀬・墨坂は、二上山地域にとって、ヤマトの西を区切る地域であるという自らの地域的特性に対応するヤマトの東を区切る地域として、深く意識されたものと思われる。そしてその意識は、この「大坂」の地から長尾街道や初瀬・伊勢街道という横大路を経て伊勢へと通ずる東への道を媒介として培われたものであったに違いない。

一方、大晦日から元旦にかけてキツネノヒが揺曳すると伝えられる築山は、竜王社付近から横大路と分岐した初瀬・伊勢街道が高田川を越える辺りになる。この高田川は、俗に中将川とも呼ばれその川筋には、多くの中将姫伝承が分布している。以下、関連市町村史から抜粋する[15]。

別所

○蓮池の蓮　東方に蓮池がある。十二社神社の東北にあたる。阿弥陀寺の蓮という。この蓮池の蓮が当麻寺へ運ばれて、中将姫が当麻曼荼羅を織ったと伝えられる。(『香芝町史』)

笠

○地黒池　中将姫が奈良から当麻寺へ通われた時、高田川（俗に中将川）の堤防に沿い笠を通り過ぎる時、折悪く婦人の月経があったので着物をここの小池ですすがれた。それでこの池を血黒池とよんでいる。(『大和馬見町史』『広陵町史』)

○ナデシコの花　むかし、奈良盆地にナデシコの花が一つもなかった。それで中将姫が、ナデシコの種子を高田川の堤に蒔かれた。それから堤防に一面、毎年美しい花が咲くようになったという。そのナデシコの花は真紅で普通の種類のものとは少し異なっている。(『広陵町史』)

安部

○中将橋　安部のバス停留場から一町東に中将橋がある。今はコンクリートだが、以前は土橋であった。むかし中将姫が奈良から当麻寺へ通われた時に橋の上で侍女と共にお休みになったと伝える。ここを流れている川を俗に中将川（今の高田川)。また平尾にも中将川中とか中将という地名がある。(『広陵町史』) 昔中将姫は六道山から築山をへて大谷を通って当麻寺へ行かれたという。(『大和馬見町史』)

○中将地蔵　小字東中将、西中将という地名がある。この中将畑から一体の地蔵尊が表れた。それを今の〈小字〉横大路（〈よこだいどう〉横大道とも書く）に安置して中将地蔵と名づけている。中将姫の像だという。(『広陵町史』、〈 〉内は『大和馬見町史』)

○仏谷　安部から別所（香芝町〈五位堂村〉）に越す坂道を仏ヵ谷（ほとけだに）という。中将姫が当麻寺へお通いになった時、この坂を越えられるのに、疲労をおぼえられたので、いつも念仏を唱えられていた。そして生きながら極楽の定想を得て仏様になられたので、かく名づけたという。穂雷神社のあるところも字仏谷といい、浄土寺も山号を仏谷山としている。(『広陵町史』、〈 〉内は『大和馬見町史』)

伝承地及び伝承中に現れる地名の所在地は、地図上の丸で囲んだ地域で、ほぼ、高田川と初瀬・伊勢街道、そして二上山がフタカミとして仰ぐことが出来る限界ラインとして引いた直線に囲まれた地域にあたる。今調査で現地確認できたのは、血黒池と中将橋のみで、しかも付随の中将姫伝承については聞くことが出来なかったが、この地域からは二上山の美しいフタカミの山容が、殆どどこからでも望むことが出来る。また、中将橋を渡って仏谷と思われる安部から別所に越す坂道沿いには地蔵尊が随所に祀られており、坂の頂上に到るとそれまで上り坂で見えなかった二上山の姿がフタカミの山容をもって一気に視界に入ってくる。中将姫がここを通るのにいつも念仏を唱え、生きながら極楽の定想を得たという伝承の地としてさもありなんと思わせる道である。

二上山地域の中将姫伝承は、現地調査と関係市町村史に拠る限り、この高田川流域と當麻寺とその近傍に集中する。當麻寺とその近傍に中将姫伝承が存在するのは当然として、そこからやや東に離れた高田川流域に中将姫伝承が存在するのは、この地域に地域の東の区切りとして高田川を意識する心意があったことを示しているのではなかろうか。それが何によってもたらされたのかを今は明らかにすることは難しいが、そこに交錯するように初瀬・伊勢街道が通っていることは、或いはヤマト全体の東西観がこの地域を通る道に媒介されて生み出されていたのと同様、初瀬・伊勢街道の存在が大きかったのかも知れない。伝承される元旦のキツネノヒは、築山付近を南北に揺曳したのだという[16]。そこには、初瀬・伊勢街道がほぼ南北に通っているのであった。

注

1）小泉俊夫『石器のふるさと香芝』　私家版　１９８８年。

2）和田萃「大坂・大坂山・大坂道」　奈良県文化財調査報告書第４３集『奈良県「歴史の道」調査報告書―竹之内街道（二上山麓の道）―』　奈良県教育委員会　１９８４年。

3）注2）に同じ。
4）香芝市二上山博物館　かしばの文化財１０『太子道―斑鳩から磯長を結ぶ道―』　香芝市教育委員会　２０００年。
5）當麻町史編纂委員会編『當麻町史』　當麻町教育委員会　１９７６年。
6）池田末則編『大和馬見町史』　馬見町教育委員会　１９５５年。
7）上野勝己「竹内街道・岩屋口の〝道教え〟―古文書に見える道標建立を巡って―」　太子町立竹内街道歴史資料館編『竹内街道の道しるべ』　太子町立竹内街道歴史資料館　１９９６年
8）土井実・池田末則編『大和下田村史』　下田村　１９５６年。
香芝町史調査員会『香芝町史』　香芝町　１９７６年。
池田末則編『當麻村誌』　當麻村教育委員会　１９５６年。
9）池田末則編『二上村史』　二上村教育委員会　１９５６年。
香芝町史調査員会『香芝町史』　香芝町　１９７６年。
10）池田末則編『當麻村誌』　當麻村教育委員会　１９５６年。
11）注10）に同じ。
12）池田末則編『二上村史』　二上村教育委員会　１９５６年。
13）注10）に同じ。
14）注12）に同じ。
15）広陵町史編集委員会『広陵町史』　広陵町　１９６５年。他の市町村史は既出。
16）注10）に同じ。

當麻町は、２００４年１０月１日、新庄町と合併し葛城市となったが、本論では、論の都合上もとの「當麻町」の呼称を用いた。

〔附論〕『死者の書』が描いた二上山

渡部　修

1．滋賀津彦の墓と古道

これで大和も、河内との境ぢやで、もう魂ごひの行もすんだ。今時分は、郎女さまのからだは、廬の中で魂をとり返して、ぴち〳〵して居られようぞ。

こゝは、何処だいの。

知らぬかいよ。大和にとつては大和の国、河内にとっては河内の国の大関。二上の当麻路の関――。（『死者の書』二）

南家の郎女の魂乞いを終えた九人の者たちの会話である。魂乞いを行った場所は「二上の当麻路の関」であるという。そして、そこには一つの塚があった。滋賀津彦（大津皇子）の墓である。

現在、二上山中には、雄岳頂上から大和側に僅かに降ったところが大津皇子の墓の伝承地となっている。しかしここは、明治期になって新たに定められたもので実際に大津が移葬された地とは考えられていない。実際の移葬地としては、當麻町の鳥谷口古墳とする説が有力のようである[1)]。ちょうど、當麻町から二上山への登り口に当たっている。

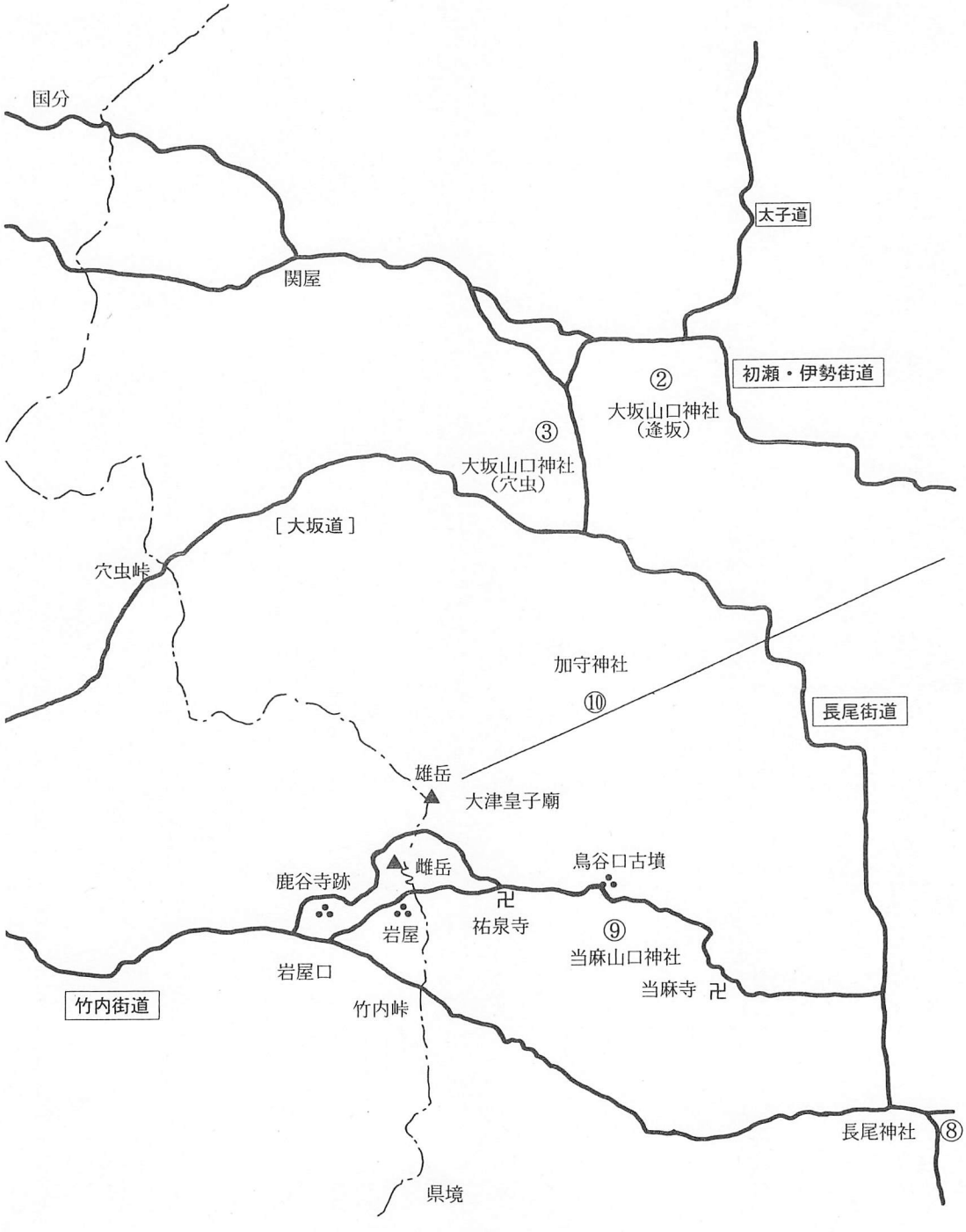
ところが作品中での塚の位置は、これらとは大きく異なっている。

塚が登場する第二章は、冒頭に、月に照らされて輝く河内側に広がった水の景が描かれる。石川から大和川、遠く日下江・永瀬江・難波江まで見えるという。そして目の下には山田谷の小桜の遅れ咲きが、ちらちらと雪のように輝いて見えるともある。山田谷は、太子町山田である。こうした景色は二上山頂から河内側に向かわなければ見ることができない。そして、当麻路の道筋と塚の位置が次のように提示される。

一本の路が、真直ぐに通つている。二上山の男嶽・女嶽の間から、急に降つて来るのである。難波から飛鳥の都への古い間道なので、日によつては、昼は相応な人通りがある。道は白々と広く、夜目には、芝草の蔓つて居るのすら見える。当麻路である。一降りして又、大降りにかゝらうとする処が、中だるみに、やゝ坦くなつてゐた。梢の尖つた栢の木の森。半世紀を経た位の木ぶりが、一様に揃つて見える。月の光も薄い木陰全体が、勾配を背負つて造られた円塚であつた。（同前）

二上山の雄岳・雌岳の間は「馬の背」と呼ばれる。そこから一旦急に降り、更に大降りにかかろうとするところに円塚はあるのだという。大和側から向かえば、明らかに馬の背を越えて河内側に入ったところと考えなければならない。更に、南家の郎女の魂乞いの九人が塚までやってくる場面でも「当麻路をこちらへ降つて来るらしい影が、見え出した。〈略〉急な降りを一気に、この河内路へ駆けおりて来る」とある。当麻路を降って河内へと入っているから「河内路」というのであろう。滋賀津彦の墓は、今日の大津皇子の墓として考えられている場所とは全く異なり、二上山の河内側に設定されているのである。

二上山河内側には、奈良時代に造られた大陸風石窟寺院として、岩屋・鹿谷寺遺跡が残り、国史跡となっている。この二つの遺跡のうち、岩屋には中将姫がここで当麻曼荼羅を織り上げたのだとの伝承が残されている[2)]。そして、この岩屋は、當麻町染野の伝承では、旧暦三月二十三日のダケノボリの日、伊勢参りから帰る者達を親戚一同が迎える地でもあった[3)]。地籍は勿論河内である。しかし、ここは大和の人々にとっては大和が河内と接する地でもあったのである。「これで大和も、河内との境ぢやで」或いは「大和にとつては大和の国、河内にとっては河内の国の大関。二上の当麻路の関」と表現される場所として、ここ岩屋は誠に相応しい。鹿谷寺は、これに比して些か河内側に降り過ぎているためか、今日確認できる大和側の伝承に現れることはない。



『死者の書』関係図

岩屋を通っては、「岩屋越え」と称される道が、河内太子町から大和當麻町へと抜けている。太子町山田の岩屋口（現万葉の森付近）から竹之内街道に別れて二上山中に入り、岩屋から岩屋峠を越えて当麻に抜ける道で、雌岳の南の肩を通っている。馬の背を越える道とは当麻側の祐泉寺付近で合流し、鳥谷口古墳、当麻山口神社を経て当麻へと続く。

馬の背越えの道へは、岩屋からも行くことはできるし、岩屋口から鹿谷寺を経ても合流できる。但し、この道は大和側の傾斜がきつく、現実の街道としてどの程度機能したのか疑問が残る。それに比すれば、岩屋越えの方が圧倒的に楽に二上山を越えることができる。しかも、竹之内街道を通るより當麻寺にはずっと近い。岩屋下には江戸から昭和にかけての道標が幾つか残されているし[4]、峠付近には「当麻寺近道」の案内板も設置されている。また、江戸期には、この岩屋越えの道の整備に関わって、竹之内越えを擁する竹之内村が岩屋越えを擁する山田村・當麻村を相手に訴訟を起こしている。岩屋越えの整備に伴って、大阪・堺方面からの旅人が岩屋越えを利用するようになり、旅人の減少によって竹之内村が経済的打撃を受けたというのが理由である[5]。竹之内越えは、推古紀の「大道」にまで遡りうる当地の主要道である。それに対して岩屋越えはあくまで「間道」でしかない。しかし、こうした訴訟が起こされるほど岩屋越えを利用する旅人は多かったのである。「難波から飛鳥の都への古い間道なので、日によっては、昼は相応な人通りがある」という描写は、岩屋越えの道にこそ相応しかろう。

もとより、『死者の書』は小説である。滋賀津彦の墓にしろ、そこを通る道にしろ、虚構の上に設定されて構わないものである。しかし、当然のことながら、折口はこの二上山地域の伝承は知悉していただろうし、少なくとも折口の少・青年時代までは當麻町の伊勢参りも現実に行われていたはずである。滋賀津彦は「吾子の為了せなんだ荒びこころで、吾子よりももつと、わるい猛び心を持つた者の、大和に来向ふのを、待ち押へ、塞へ防いで居ろ」として埋められたのであった。その埋葬地のイメージ形成に、大和と河内の境として現実に機能していた岩屋とそこを越える道が与って力あったことには、十分な蓋然性が認められよう[6]。その上で折口は、現実に間道として機能した岩屋越えとは異なる馬の背越えの道を当麻路として設定したものと思う。それは、そうあって初めて、蘇った滋賀津彦の姿が、南家の郎女にとって「二上山越しの俤人」となるからに他なるまい。

2．南家の郎女と二上山

郎女の家は、奈良東城、右京三條第三坊にある。　（六）

南家の郎女は、この屋敷の北に設けられた女部屋で、父豊成のもたらした称讃浄土仏摂受経の千部写経に勤しんでいた。女部屋には西に蔀戸があり、それを上げると方三尺位の窓になるという。写経が九百部を越える頃から、姫は「うつとりと蔀戸越しに、西の空を見入つているのが、皆の目にたつほど」になった。それは、この写経の途中、一年前の春分の日、そして半年前の秋分の日、西の空に二上山を見、その二つの峯の間に「ありへと荘厳な人の俤」を見たためであった。そして千部目を書き上げたこの春分の夕暮れ、外は雨である。一向に晴れる気配のない雨に、俤人の姿を求めて焦慮に駆られた郎女は、その夜家を出て、行く手に見える二上山の姿に導かれて西へ西へと歩き続け、明け方には現実の葛城二上山の麓、當麻寺までやって来ていたのであった。

以上が、『死者の書』の描く、南家の郎女と二上山との出会いである。

まず、「奈良東城、右京三條第三坊」という屋敷の位置自体が解せないのだが、そもそも平城に屋

敷あるなら、それがどこにあろうと葛城二上山はフタカミとしては望めない[7]。平城から西に望めるのは、生駒山である。が、郎女は、フタカミの姿を二度にわたって、その二つの峯の間に出現する俤人の姿と共に西の蔀戸から見たのであった。そして、それに導かれて葛城二上山まであくがれ出るのである。郎女は、千部写経の恍惚感の内に、二上山とそこに現れる俤人の姿を見、その幻影に導かれて現実の葛城二上山まで辿り着いたということになる。

夜来の雨が上がった二上山の麓から、郎女は父母の生まれ育った飛鳥・藤原の里の景を眺め、振り帰って二上山の姿を間近に仰ぎ見る。その心持ちは、「平野の里に感じた喜びは、過去生に向けてのものであり、今此山を仰ぎ見ての驚きは、未来世を思ふ心踊り」と表現される。二上山が、現身の南家の郎女の心を回路として過去と未来とを繋ぐ場として描かれているとみてよいだろう。

繰り返すが、平城から西には、葛城二上山はフタカミの山容としては望めない。しかも郎女は「一足も女部屋を出ぬのを、美徳とする時代に居る身」とある。郎女は、女部屋を一足も出ない環境で千部写経を行い、その恍惚感の中で、見たこともない二上山のフタカミの山容を感得するのである。二上山がフタカミの山容として望めるのは、大和盆地南部、宮都造営地としては飛鳥・藤原の地に限られる[8]。郎女が二上山の麓から飛鳥・藤原の里を眺めて感じた「喜び」とは、実際に二上山をフタカミとして仰いで生活し続けていた父祖達の暮らしを実感できたという喜びなのであろう。それ故にこそ、それは「過去生に向けてのもの」とされているのだと思う。郎女の見たフタカミの幻影とは、二上山をフタカミとして仰いで暮らした飛鳥・藤原の人々の心意が二上山をフタカミとして仰ぐことができない平城に暮らす人々の心意にも受け継がれていたことを象徴的に表しているといえるのではなかろうか。

ところで、郎女の屋敷からは、日は、「稍坤によつた遠い山の端に沈む」のだという。これが具体的にどの辺りかは定めがたいが、葛城二上山の雄岳は平城の西南遙かに望むことができる。平城から法隆寺を経て河内・難波へと向かう場合、常にこの雄岳を前方に望むことになる。そしてその頂きには、大津皇子の墓が伝承されている。既に述べたとおり、これを実際の大津の移葬地とは考えがたい。しかし、平城に暮らす人々にとって二上山とは雄岳以外にあり得ないのである。飛鳥・藤原の人々は、大津の姉、大伯皇女が「二上山を兄弟とわが見む」と詠んだように、フタカミの山容と共に非業の死を遂げた大津をその記憶に留めたはずである。そして平城に都が移った後も、その記憶は受け継がれ続けたであろう。しかし、現実に見る二上山はそのフタカミの山容を失い、雄岳のみとなってしまった。そうなれば、自然、フタカミと大津の記憶は、雄岳に象徴的に投影されることになる。フタカミと大津の記憶が、雄岳しか望めない平城の生活の中で、雄岳の頂きに大津の墓を求める心意を形成するのである。逆に言えば、雄岳に大津の墓を求める心意の底には、飛鳥・藤原以来のフタカミと大津の記憶が沈殿しているということになる。郎女の見た幻影はまず、平城に暮らし続けた人々のこうした伝承心意を描いているものと思う。それはひとり南家の郎女のみに限らず、飛鳥・藤原に生きた人々の心意を受け継いで平城に暮らす人々の伝承心意として、確かに「過去生」へと繋がっていたものだったといえるだろう。

郎女に幻影を見せたもう一つの要因は、千部写経である。書写された称讃浄土仏摂受経は、奈良時代には盛んに書写されたものであるらしい[9]。浄土信仰、阿弥陀信仰の興隆があったということなのだろうが、『死者の書』ではこの経は「大和一国の大寺と言ふ大寺に、まだ一部も蔵せられて居ぬものであつた」とされる。そのような経が郎女の元にもたらされたのは、父豊成が太宰師だったからである。

国の版図の上では、東に偏り過ぎた山国の首都よりも、太宰府は、遙かに開けてゐた。大陸から

渡る新しい文物は、皆一度は、この遠の宮廷領を通過するのであつた。唐から渡つた書物などで、太宰府ぎりに、都まで出て来ないものが、なか〳〵多かつた。
学問や、芸術の味ひを知り初めた志の深い人たちは、だから、大唐までは望まれぬこと、せめて太宰府へだけはと、筑紫下りを念願するほどであつた。（六）

太宰府が新しい心持ちを持った人々にとって、この国の文化の先進地域として憧れの対象であったことが描かれている。平城の人々は、都の遙か西方に、先進文化の流入する新世界を見ていたのである。

郎女は写経を通じ、深く浄土信仰に傾倒したであろう。それが、郎女に西への憧れを持たせた直接の要因である。西の空に現れる俤人は、阿弥陀仏なのであって、西方浄土への憧れが、郎女に幻影を見せるのである。しかし、郎女の写した経は、未だ都にはない、当時の最も新しいものなのであった。郎女の見た幻影は、単に最新の経によってもたらされた浄土信仰が形象化したものではない。その底には、最新文化を西に追い求め続けた当時の都びとたちの西への憧れが潜んでいると考えねばなるまい。

さて、飛鳥・藤原の時代、大陸の最新の文物は「大坂」を越えて都に入るのであった。「大坂」とは葛城二上山北麓を中核とし、更にその北から二上山の南麓までを含んだかなり広い地域の呼称であったと考えられる。そこには、都と河内・難波を繋ぐ数本の道が通っていた。それらを通して、西から新しい人も物も都へと入ってくるのである。その「大坂」を象徴するように都の西に聳えるのが、フタカミの山容を持った葛城二上山であった[10]。飛鳥・藤原の人々にとって、西に仰ぐ葛城二上山は、最新文化の流入と不可分の存在だったに違いない。二上山を越えて新たなものがやってくる、二上山を越えれば新しい世界が広がる。飛鳥・藤原の人々にとって葛城二上山の向こうに見えるのは、西に広がる当時の最先端の世界の幻影でもあったはずなのである。

郎女が見た、見えるはずのない二上山は、最新の仏典を写すことによって現れる。そこには、飛鳥・藤原に生きた人々の二上山の向こうに最先端の世界を求める心意が反映していよう。そしてその心意は、郎女を初めとする平城に生きる人々の西方への憧れにも繋がっていよう。郎女が現実の葛城二上山を仰いで感じた「未来世を思ふ心踊り」には、こうした心意も潜んでいたに違いない。郎女の見た二上山の幻影とは、飛鳥・藤原以来、平城まで都に生きた人々の、西方葛城二上山の彼方に新しい世界を求める心意に、平城最新の浄土信仰の衣を着せて形象化したものでもあったのである。

『死者の書』に二上山が登場するのは、同書が當麻寺縁の中将姫伝承を素材の一つに用いているからというばかりではない。二上山は、都が飛鳥・藤原にあった時代に形成された西の境に対する恐れとその地を越えて広がる新しい世界に対する憧れを、平城に今生きる南家の郎女を通して表現する場なのである。現実の葛城二上山の麓に立って郎女に生じた「平野の里に感じた喜びは、過去生に向けてのものであり、今此山を仰ぎ見ての驚きは、未来世を思ふ心踊り」という感慨は、ひとり南家の郎女のみに限ったものではなく、それは、飛鳥・藤原以来、平城までヤマトの都に生きた人々、言わばヤマトびととでも言うべき人々に受け継がれて来た感慨そのものだったものと思う。

3．甦りの山

滋賀津彦がこの世に執心を残す基となったのは、耳面刀自であった。

耳面刀自は、大織冠藤原鎌足の娘で不比等の妹、郎女の祖父武智麻呂にとっては、叔母にあたる。

謀反の罪で死を賜った滋賀津彦は、死に臨んでたまたまちらりと見たその娘の姿に執心を残した。そしてその亡骸が当麻路の辺に埋められる時には、その魂が若い衆に乗り移って藤原の娘を求める歌をもうたった。郎女は、その魂に導かれて二上山の麓、当麻の地まで導かれたに違いない。当麻の姥は、郎女にそう語り聞かせる。

ところが、郎女には、姥の語りの詞に真実を感じはしても、自からが見た幻影に滋賀津彦の姿を重ねて見ることがどうしてもできない。彼女には、その姿が「此日本の国の人とは思はれぬ」のである。そして、姥に尋ねる。

> その飛鳥の宮の日のみ子さまに仕へた、と言ふお方は、昔の罪人らしいに、其が又何とした訣で、姫の前に立ち現れては、神々しく見えるであらうぞ。　（四）

郎女がここで「神々しく見える」と感じているのは、彼女の目に現れた幻影に「尊い御仏と申すやうな相好」を感じているからである。しかし、当麻の姥は、郎女の問う幻影の神々しさを、それが天の神に弓引いた天若日子の姿だからだという。滋賀津彦と天若日子とが重ね合わされているのである。郎女の心と姥の心は、全く正反対の方向、前者は未来へ、後者は過去へと向いている。郎女の心が未来へと向くのは、写経の故である。姥の心が過去へと向くのは、耳面刀自に繋がる郎女の血に信頼を置くからであろう。が、小説では、その郎女の血もまた、未来への指向に繋がるものとして描かれている。

郎女が書写したのは、称讃浄土仏摂受経のみではなかった。それ以前に、法華経、楽毅論、そして仏本伝来記（元興寺縁起文）も書写している。法華経は橘夫人、楽毅論は光明皇后、仏本伝来記は父豊成の手になるものであった。橘夫人は曾祖父不比等の妻で、郎女とは血縁関係にはないものの曾祖母、光明皇后は不比等と橘夫人との間にできた娘だから、郎女にとっては大叔母にあたる。父、豊成はいうまでもない。法華経と楽毅論は、豊成が大切にしていたものだが、豊成はそれを太宰府下向に際し、郎女の守りとして帳台の後ろに誰にも言わずに留め置いたのであった。そして、それが発見されて一月も経たない内、今度は二十年ほども前、豊成自身が父武智麻呂の七回忌に発願して書き綴った仏本伝来記が、ゆくりなく南家へ戻って来たのである。郎女はこの出来事によって、法華経、楽毅論はもとより、仏本伝来記も一心に習い通すこととなった。仏本伝来記がもたらされたとき、郎女は元興寺の方を礼拝し、その後、「難波とはやらは、どちらに当たるかえ」と尋ねると、示された方角へ顔を向け「数珠の珠の水精のやうな涙」を流す。郎女の心は、血に繋がる人々によって、西方浄土という未来へと向けられているのである。

耳面刀自に繋がる血筋から言えば、南家の郎女は、滋賀津彦を、更には天若日子の鎮まらぬ魂を祀る女としての要素を備えていることになるのだろう。しかし、そうした古い時代の女に繋がる要素がある一方で、その血筋には、西方への憧れという新たな時代を呼び込む要素もまた存在したのである。郎女の内なる血には、未来への指向も同時に潜ませられていたことになる。

この、法華経・楽毅論・仏本伝来記が郎女の目に触れる第十章は、石城の話で語り出される。外からの魔の進入、転じて娘に夜這いをかける男の進入を信仰上防いでいた石城が、平城の世になって禁じられたという話である。石城の禁断によって、防げる筈のものが防げなくなってしまった例として、藤原四流を襲った天然痘の流行が描かれている。もとより石城で天然痘が防げる訳はない。あくまで、石城は防御の象徴である。郎女の藤原南家は、その石城を、それに代わる築土垣が多く見られるようになった平城の御代においてもなお残している家であった。しかし、そこに生まれ、外の世界を見る

こともなく女部屋に暮らし続けた郎女の内部に、新たな時代、未来を呼び込む要素が、自らの親族・血族を通して何時しか入り込んでいたのである。石城が石城として働かなくなってしまった時代が訪れたということに他ならない。

謀反人滋賀津彦の亡骸が、二上山中当麻路の辺に埋められたのは、二上山がヤマトの石城だったからである。二上山が石城である限り、そこに留められた滋賀津彦の魂は、縁の女によって斎き祀られるべきものなのだろう。しかし、二上山はヤマトの石城であると同時に、西方の新世界への窓口でもあった。しかも、滋賀津彦の魂を斎き祀るべき縁の女、南家の郎女の内には、西方新世界への憧れが既に深く根付いていた。郎女にとって二上山は、古い石城ではなく、憧れの西方世界への確かな入り口なのである。滋賀津彦の魂が、そうした郎女を呼び寄せ、自らを祀らせたとき、二上山はもはやヤマトの石城としての性格を失い、新たな西方世界への入り口、新来の神――御仏来臨の地となるのである。

郎女の古い伝承世界に繋がる血を信じた当麻の姥は、当麻氏に繋がる淳仁天皇即位に際して氏の語部たる自分が何ら顧みられなかったことに落胆し、自らの時代がもはや終わったことを痛感する。その傍らで郎女は、自ら織り上げた上帛の上に、かつて平城の家に送られた大唐の絵の具を取り寄せて、極彩の画を描き始める。それは郎女が二上山の麓に導かれて半年、この秋分の日の夕べに「近々と目に見た俤びとの姿を、心に覓めて」描き出されたものであった。郎女は画を描き終えると、満足した様相で庵を立ち去る。するとその画は、たちまちにして浄土変相の曼荼羅へと姿を変える。謀反人滋賀津彦の魂は、西方浄土を追い求める郎女の手によって浄化され、仏として甦るわけである。

『死者の書』は葛城二上山を、ヤマトの石城として、そして西方新世界に繋がる甦りの聖地として描いている。その姿は誠に、飛鳥・藤原以来の都人がこの山に抱き続けてきた心意を、この山の麓に伝わる中将姫伝承を基軸に据えて形象化したものに他ならなかったといえるだろう。

注

1）和田萃「大津皇子の墓―鳥谷口古墳と加守寺の長六角堂―」　奈良県文化財調査報告書第６７集『鳥谷口古墳―北葛城郡當麻町染野所在の終末期古墳―』　奈良県立橿原考古学研究所　１９９４年。後、『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上（塙書房　１９９５年）所収。
2）上野勝己「竹内街道・岩屋口の”道教え”―古文書に見える道標建立を巡って―」　太子町立竹内街道歴史資料館編『竹内街道の道しるべ』　太子町立竹内街道歴史資料館　１９９６年
3）池田末則編『當麻村誌』　當麻村教育委員会　１９５６年。
4）太子町立竹内街道歴史資料館編『竹内街道の道しるべ』　太子町立竹内街道歴史資料館　１９９６年。
5）注２）に同じ。
6）滋賀津彦の埋葬地に付いては、鹿谷寺跡を中心に設定されたとする説もある。（池田弥三郎　日本近代文学大系４６『折口信夫集』〈角川書店　１９７２年〉補注２５、中村浩「折口信夫の世界（7）」〈『芸能』１９－７　１９７７年〉）
7）日本近代文学大系４６『折口信夫集』（角川書店　１９７２年）補注６３、６９。但し、同書の本文では「奈良東城、右京三条第七坊」となっている。「三条三坊」は著者の訂正原本による新編全集編纂に当たっての校訂の結果である。それでも、「奈良東城」は所謂「外京」のことであろうから、そこを「右京」とする矛盾は解消されないし、そもそも平城からは葛城二上山がフタカミとして見えないことに変わりはない。
8）拙稿「ヤマトの西と東と―古道に見る二上山地域―」第２節参照。
9）日本近代文学大系４６『折口信夫集』（角川書店　１９７２年）補注６６。
10）注８）に同じ。

『死者の書』本文は、新編折口信夫全集第２７巻に拠った。但し、振り仮名は省いた。

また、當麻町は、２００４年１０月１日、新庄町と合併し葛城市となったが、本論では、論の都合上もとの「當麻町」の呼称を用いた。